

## 連載 オブジェクト指向と哲学

### 第 54 回 ヘラクレイトス - 弁証法的発展

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

前回は、ヘラクレイトスの万物流転（パンタ・レイ）は生命の動的平衡[1]と相通じるものであるということを考えてみました。川の水は日々刻々入れ替わっても川は存続する。万物は日々刻々生まれきたるものと流れ去ってゆくもののバランスの上に存続している。その内部は物理的に入れ替わりつつも、そこに生息しているそのものの本質、普遍的なものが確かにある。それは直接目に見えない、五感で観察できるのは刻一刻変化し続けているものの一瞬の姿に過ぎない。

今回は、ヘラクレイトスをヘーゲルの弁証法的発展という側面で考えてみたいと思います。

#### ●全体と部分

--

一緒に結びついているもの。それは、全体と全体ならぬもの。寄せ集められたものと分け離されたもの。調子の合ったものと合わないもの。万物から一が、一から万物が生ずる。(断片 10) [2]

--

複合オブジェクトという概念があります。全体と部分、全体オブジェクトは部品オブジェクトで構成されているという捉え方です。人間社会で考えるなら会社というオブジェクトは部という組織で構成され、部というオブジェクトは課という組織で構成される。大きな組織は内部に小さな組織を内包するという階層構造、最後は社員になります。人が集まって組織となり、それが会社を構成します。様々な粒度の組織も人もオブジェクトです。

世界 70 億の人間も「調子の合ったものと合わないもの」で民族や国家に分かれて地球人類を構成しています。

#### ●万物は争いによって生まれる

過激な言葉です。

--

戦いは万物の父であり、万物の王である。(以下省略) (断片 53) [2]

--

老子は「万物の母」から世界がタオの力で自然に生み出されるとしますが、ヘラクレイトスは

「万物の父」が戦いにより積極的に世界を生み出すとします。

ヘラクレイトスの世界観は静的な調和ではなく、対立から生まれる協調が本質的であるとします。

--

反対するものが協調する。そして異なる（音）から最も美しい音調が生じ、万物は争いによって生まれる。（断片 8） [2]

--

音楽を宇宙の本質と結びつけたのはピュタゴラスです。ヘラクレイトスは約 30 年弱年で[2]、当時ギリシャ世界でよく知られていたピュタゴラスに言及していますが、なぜかあまり好意的なものではありません。

--

ムネサルコスの子ピュタゴラスは、すべての人間たちのなかでも最もよく学問に励んだ。そしてその種の書物を抜粋して、自前の智なるものを案出した。それはしかし、ただの博学であり欺瞞である。（断片 129） [2]

--

まだあります。

--

博学は真の智を教えはしない。そうでなかったら、ヘシオドスにもピュタゴラスにも、さらにまたクセノパネスやヘカタイオスにも教えたであろうから。（断片 40） [2]

--

やや横道に逸れますが、断片 40 の論法はプラトンの「メノン」 [5]の一節を思い浮かべます。メノンの「徳は教えられるか」という問いにソクラテスは以下のような話をします。

ペリクレスとその 2 人の息子など、アテナイの徳あると思われる人々の子がいずれもその父親程徳ある人とは思われていないという例を列挙して行きます。徳が教えられるものなら、どうして父が子に教えないことがあるのか。結局じつは教えることはできないのだと考えます。

--

人々は理解しないのだ、いかにして、拡散するものが自己のうちに凝集しているかを。互いに逆方向に引きあうことでの調和（結合）というものがある、弓や豎琴の例にみるように。（断片 5 1） [2]

--

「対立するものどうしは、互いに緊張関係にあるが、まさにこの相克の中で互いを必要とし合っている。つまり双方は全体として、相互に促進し合い、適切な均衡を実現し合うような生き生きとした統一、秩序を形成しているのである。」[3]

弓や竖琴は弦を適度に反対方向に引っ張り合ってその用をなしています。地球は太陽の周りを 1 年で公転していますが、その外に向かう遠心力と、太陽と地球が引き合う引力とがちょうどバランスして平衡状態を保っています。

### ●「対立」するものは、互いに似てくる[4]

田坂広志著「使える弁証法」[4]はヘーゲルの弁証法をわかりやすく説明しています。歴史は繰り返す。振り子のように右にいったら左に戻り、それを永遠に繰り返す。単純な繰り返しではなく、螺旋階段を上って行く。振幅のたびに上昇し、全く元に戻ることはない。なんらかの進歩がある。

同書を読み進めると、次のような一節がヘラクレイトスにヒットします。

--

物事は、対立物の相互浸透により発展する。

対立し、闘争している二つのものは、互いの性質が相互に浸透していく。

争っているもの同士は、互いに似てくる。[4]

--

これはヘラクレイトスの「万物は争いによって生まれる。」(断片 8)と同じことを言っています。この争いは相手を打ち負かし、滅ぼすことではなく、Win-Win で新たな価値を生み出すものです。アレキサンダー大王は、戦争による結果として、ギリシャ文明と古代オリエント文明を融合しヘレニズム文明を生み出しました。

--

弁証法における「復活」とは、新しいものを内包した「復活」であり、弁証法における「否定」とは、否定するものを内包した「否定」です。

すなわち、弁証法においては、対立し、争うかに見える二つのものが、ある意味で互いに相手を内包していき、結果として、両者が「統合」されていくのです。[4]

--

争いは相互を内包した統合を生む。「物事は、矛盾の止揚により発展する」- ヘーゲルとヘラクレイトスで言葉は異なりますが、「詩人や哲人の表面的な物知りぶりを冷笑していた」[2]ヘラクレイトスもこの言葉は評価するでしょう。

### ●動的平衡と弁証法的発展

ここまでまとめると、ヘラクレイトスは、ミレトス派もエレア派も唱えなかった 2 つの重要なことを言っています。

第 1 は「万物流転」という概念により、動的平衡により生きているという状態を示した。内部で継続的に生まれるものと流れ去ってゆくもののバランスで全体は生きている。

第 2 は「戦いは万物の父であり、万物の王である」という、争いにより新たな価値を生み出す弁証法的発展の概念です。弓や豎琴の弦が反対方向に引き合うのも力の平衡状態ですが、動的平衡のように生きているわけではありません。争ってはいますが内部で生成・消滅はありません。この争いは一方だけでは成し得ない価値を生み出します。お互いを活かす相互作用です。

ヘラクレイトスの思想は今日でも生きています。

### 参考書籍

- [1]福岡伸一、動的平衡、2009、木楽舎
- [2]廣川洋一、ソクラテス以前の哲学者、1997、講談社学術文庫
- [3]クラウス・リーゼンフーバー、西洋古代・中世哲学史、2000、平凡社ライブラリー
- [4]田坂広志、使える弁証法、2005、東洋経済新報社
- [5]プラトン、【訳】藤沢令夫、メノン、1994、岩波文庫